

付度けれども、左様にも成らず。我等も死場近寄けるに付急ぐなり、少と取掛り方遅く成たりと、品川左門などへ被仰、御後悔の御様子に見えけりと。瑞龍閣記に云ふ。龍公觀政雄藩。樹風北海之暇、要表其祖惠、修其遠忌。癸丑春立國祖暨織田右府其令眷其世子之廟於城側。護構一香刹。號法圓寺。以廣山和尚爲開祖。公自受菩薩戒。故賓天之時、和尚爲公導師。茶毗奉葬法圓寺。微公在喪、弗堪哽咽。忽發大供養心。服闋則鳩良材。此建伽藍。併嚮所構法圓寺。始號之瑞龍寺。斯後正保乙酉再興。至明曆丙申落成。堂閣之鉅麗。廊寮之雄富。足以稱大邦功德院也。此舉也。命良匠山上喜廣。取其造法於脂那萬壽寺。然而微公猶所慮弗弭。於此。而要比泊先公五十忌期。使諸堂諸器爲完具也。惜矣哉。未果其志。萬治戊戌變而歎矣云々。平次按ずるに、始號之瑞龍寺と載せたるは非也。利常卿興造し給へる頃は瑞龍院と呼べり。その後瑞龍寺と改稱すといへども、其の年月を傳承せずといへり。又高岡の利長卿墓墳は、菅家見聞集に、正保二年高岡瑞龍公之御墓墳御石塔、宮城采女・淺香左京兩人奉行被仰付、結構に建築被命と見え、混見摘寫には、

御墓所建築方奉行伴八矢・堀與左衛門兩人被仰付、御廟の石垣結構無限也。御石塔の下石壇高さ二間に四間四方、其の上に石塔を建て、左右面に蓮の花と葉とを狩野法眼に繪がせ彫付らる。御廟の左右には高き石燈籠、其外言語に絶したる結構を盡されたりと云々。或は曰く、高岡贈正二位大納言利長卿の御廟は、實に利常卿の御心をこめさせられて、建築を命ぜられし事、石壇等の結構を盡せるにて知られけり。野田山なる藩祖大納言贈一位利家卿の御廟は、實に國祖の廟堂なりしかど、其の龕抹なるに競べ見ても、高岡なる二世利長卿の廟堂は、利常卿の深き思食にて築かれ給ふ事知られけりといへり。

○槌子坂

此の坂路は、僅かなる坂なれども、昔より槌子坂と稱し、名高き坂路なり。槌子と呼べる坂名に付き、世俗に云ひ傳ふる怪談ありて、今も云ひ傳へしかど、實否不詳。

○槌子坂俗傳

北國巡杖記に云ふ。金澤小姓町の中程に、槌子坂といへるなだらかなるあやしき徑あり。草しげく溢水流れて、晝

もなにとやらんものきみあしき處也。常に小雨ふる夜半など、たま／＼不敵の人通ふに、ころ／＼と轉びありく物あり。能く／＼見れば、搗臼ほどの横槌なり。たゞ眞黒なるものにして、あなたこなたとめぐり／＼て、既に消えなんとする時、呵々と二聲ばかりわらひて、雷のひびきをなし、はつと光りうせぬ。此の怪を見たるものいにしへより幾人もありて、二三日毒氣にあたり病みぬ。故に槌子坂とよびて、夜はおのづからゆきかひも薄らぎたり。いかさま古き妖と見えて、むかしより人々の沙汰することなりきと。今按ずるに、右は明和・安永頃の俗談を載せたるものなり。此の怪談は、今も世俗にいひはやすといへども、其の實否は定かならず。大聖寺舊藩士某氏の著述せし聖城妖怪奇談と云ふ冊子にも、藩士瓜生傳・弟軍平同道にて、下河へ舟にて行けるに、夜半頃大聖寺外馬場を通りけるに、折しも臘月にて見ぬわかぬ夜なりしが、馬場の中程より、ふと先へ、黒く丸く、大きき指渡し一尺五寸許高さも一尺五寸許も有べしとおもふもの、ころ／＼と行たり。傳兄弟怪敷ものなりとて舟指竿にてたゝかんとしけるに、馬場の角むくで垣の内

へ入、それより見ぬざりけり。其後同藩萩原玄泰も、夜中右の如きものに出逢ひたりと。或人の云ふ。是は槌子といふものなりと。夫よりして傳も玄泰もつちの子に出逢ひたりと常にいへり。とあり。右大聖寺にての怪異と、此の金澤槌子坂の怪談と大凡同様のさま也。彼の槌子と呼べる怪異は、如何なるもの、性ならんか、未だ詳かならずといへども、大聖寺のと恐らくは同物なるべし。右聖城妖怪奇談は、跋に、乙巳晩夏上洗備書堂主人書とありて、書中に寛政年間の話などを載せれば、乙巳は弘化二年なるべし。輓近のものなれど、徵證とするに足れり。

○上胡桃町

此の町名は、明治廢藩置縣の際戸籍編成に付、初めて建てたる町名也。胡桃は、黒梅の呼び違ひより起りたるもの也。其の來由下文黒梅橋の條に載す。

○奥村因幡舊邸

此の邸地は、新堂形米倉の隣地にて、今裁判所の後地なり。延寶の金澤圖に、奥村因幡、前口四十五間五尺九寸、南側五十三間、北側九十九間五尺、後地四十一間三尺とあり。